

Title	モンタージュ小説論 - 近現代における文学的モンタージュの様態と機能についての考察 - (Abstract_要旨)
Author(s)	小柏, 裕俊
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2017-03-23
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k20105
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（文学）	氏名	小柏裕俊
論文題目	モンタージュ小説論 ―近現代における文学的モンタージュの様態と機能についての考察―		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>ある種の小説を読むとき、我々は読書行為が「組み立て」となっている印象を持つ。同時進行する物語、時系列を大きく入れ替えられた物語、引用の出典を辿らせる物語、テキストの配列そのものを読み手に決めさせる物語などである。こうした物語テキストは、モンタージュという概念と関連づけることができる。この用語は、もともとカメラという機械技術を介在させた「組み立て」作品、すなわちフォトモンタージュや映画について用いられるタームであったが、20世紀の小説家たちはこの手法を応用し、文学的モンタージュと言いうる手法を生み出したのである。</p> <p>しかし、今日理解されている文学的モンタージュは、引用の切り貼りとしてのモンタージュと、複数の出来事を同時的に示すモンタージュという、二つの異なる手法を指すものとなっている。そして従来の文学的モンタージュ論でこうした分裂が意識されることは少なかった。本論文では、こうした文学的モンタージュの分裂を踏まえた上で、この概念の統合を試みた。そのためには、テキストの組成や構成に目を向けるだけでなく、読者がその作品にどのように反応するのかという問いと関連づける必要がある。こうした読書行為に仲介されることで、二元的な文学的モンタージュは統合されうると考えられるからである。</p> <p>四章からなる本論文の第一章では、文学的モンタージュが二元的な概念となった経緯を示した。文学的モンタージュは、フォトモンタージュと映画のモンタージュという二つの源泉をもつが、フォトモンタージュからは引用モンタージュが派生する。しかし、モンタージュであるためには、単に引用であるというだけでなく、引用や出典の多数性や多様性、さらには引用の「剽窃的」モードを備えている必要がある。映画のモンタージュからは、複数の筋が同時的に、あるいは時間の隔たりを無化されて交互するモンタージュ、すなわち時空間的モンタージュが派生する。これについてはエイゼンシュテインのモンタージュ論が参考になるが、本論文では、文学が映画から受け取ったものを明らかにするためには、領域横断的・汎モンタージュ主義的なエイゼンシュテインの議論よりも、むしろグリフィスの映画作品が1920～30年代の英米小説に与えた影響に目を向けるべきだと指摘した。</p> <p>第二章では、こうした分裂状態にある文学的モンタージュ概念の統合を試みた。ジャン＝ピエール・モレルの物語論的定義から出発し、それを検証するなかで、読者による「組み立て」がテキストに付随していることを明らかにした。モレルによれば文学的モンタージュは、(1)複線的な物語内容(複数の行動セリーに分けられる物語内容)が、(2)線分化され交互的に配置されており、(3)線分の交差が語り手によっ</p>			

て「統括」されていないときに成立する。この「統括」の拒否(=「カット」)はモレルの議論の新しさである。本論文では、この「カット」の問題を、引用の「平坦化」、「叙述」と「提示」の相違、語り手の「統括の機能」と関連付けて考察し、そのなかで「カット」の捉え難さを明らかにした。

このほか、物語内容の複線性、交互的配列のあり方、引用と複線性の違いなどを考察し、文学的モンタージュに特有の読者の反応として以下の五つを挙げた。すなわち(1)「カット」の書き込み、(2)セリーの細分化、(3)組み込み、(4)組み直し、(5)引用の生成である。このうち後三者は、モンタージュの成立に必須の読書行為である。これらを不可欠なもの、それ以外を補足的なものとした。モンタージュ小説におけるミニマルな配列はABA'B'である。この配列をとまなう以上、そのテキストには〈縞模様〉が現れる。またそれらの縞に〈紐づけ〉されていることが、モンタージュ小説の構造である。〈紐づけ〉には、〈組み直し〉、〈組み込み〉、〈引用の生成〉に対応する〈同色をまとめる機能〉、〈同色に異色を嵌め込む機能〉、〈同色を異色に変える機能〉の三種がある。このように〈縞模様〉と〈紐づけ〉というタームを用いて文学的モンタージュの一元的定式化を試みた。

第三章では、以上のような新たな定義に従ってモンタージュ小説の類型化を試み、形式的な側面と主題的な側面に分けて一定数の小説作品を検討した。形式的な面に関しては、〈縞模様〉の「色」の数と縞の様態に応じて小説を分類した。(1)二色の縞模様、(2)三色の縞模様、(3)多色の縞模様、(4)分岐する縞と合流する縞、(5)創出される縞模様がそれである。分岐する縞と合流する縞は、複数の人物が一つのセリーをなしており、そこから分離して別のセリーをなすようになり、別人物と合流して一つのセリーとなったりする縞の様態である。小説の一部に現れる縞模様は、分岐である場合も多い。こうした変化を用いて、物語展開に緩急をつけたり、人物同士の関係を暗示したりすることができる。創出される縞模様には、三つの創出の可能性がある。〈引用の生成〉によるもの、〈組み込み〉によるもの、〈セリーの細分化〉によるものである。

モンタージュ小説に馴染みうる主題としては(1)集合住宅もの、(2)車中空想もの、(3)臨終回想ものの三つを取り上げ、形式との関連を考察した。集合住宅ものとは、多数の人物が登場し、彼らが各部屋で過ごす様子が、交互的配列を用いて描き出される小説である。そこでは多色の縞模様が用いられ、同時性が強く表される。作品例としてル・サージュ『片足の悪魔』、ペレック『人生使用法』、ビュートル『ミラノ通り』を取り上げ、「壁」を無効化するための語りの仕掛けを検討した。

車中空想ものでは、公共交通機関を利用する人物が、その車中で断続的に回想や空想にふける。車内の情景と、空想された場面が交差する小説形式である。空想は、乗客や風景に触発されれば、人物が読んでいる書物から広がることもある。車中の時間から身を引き離そうとするために空想することもある。作品例としてビュト

ール『心変わり』、福永武彦『死の島』、ツイプキン『バーデン・バーデンの夏』を取り上げ、車中の状況と空想の内容の関係性を問うた。

臨終回想ものとは、死に瀕している人物について、その死にゆく現在の記述と、過去の記憶や回想を交差させる小説である。単一の人物が、現在と記憶を交互させる場合もある。(瀕)死者の周囲にいる者たちが、死や喪の過程と過去の回想を交差させる場合もある。死にゆく当人と周囲の人物の現在と回想が交差する場合もある。作品例として、フエンテス『アルテミオ・クルスの死』、フォークナー『死の床に横たわりて』、バルベリ『至福の味』を取り上げ、死に瀕する者と彼(女)を取り巻く生者の関係性を考察した。

第四章では、モンタージュを議論の出発点とした小説批評を『心変わり』と『人生使用法』という二作品を対象に試みた。『心変わり』については、そこに繰り返し現れる空行＝「カット」に着目し、それをスクリーン＝遮蔽幕と比較した。主人公「あなた」の予定変更は、スクリーンの機能弱体化に対応している。スクリーンは「あなた」と愛人のかたわらや間に存在するものであり、両者の関係を遮りつつも保証するものである。その一方で、それは映像を可視化する仕掛けでもあり、主人公の空想が映し出される画面として、同じ車室の乗客の「表面」にも現れる。だがそれは映写された像を変容させてしまうものである。二人称の語りとも関係づけつつ、読者の「表面」にもスクリーンが作り出され、そこで物語が変容される可能性があることも指摘した。

『人生使用法』には、バートルブースが実践するパズルの解法が事細かく物語られている。これは自己言及的に小説の読解法を指し示す隠喩である。だが、構成のモンタージュと物語内容を関連づけたとき、創造的な誤読者と反語的な「生産者」という他の二人の作中人物によってパズルの読解とは異なる読解法が暗示されていることが分かる。このように、読書行為の隠喩となる三者が撚り合わされることによって、パズルの読解が補完されることが暗示されているのである。

これら二小説が示すように、文学的モンタージュ作品は、新たな読者、他なる読者によって別様に開かれることを待っているとも言えるだろう。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、モンタージュという手法を用いて書かれた小説(モンタージュ小説)に関する文学理論的考察——定義と分類の試み——であり、この種の小説を対象とする作品批評の試みである。

本論文の第一の功績は、これまで散発的に、また偏った仕方では定義されてこなかったモンタージュ小説に、包括的かつ整合性のある定義を与えたことである。筆者は、文学用語辞典の定義や、さまざまな論者(ラバテ、ロソム＝ギュイヨン、ビルジュラン、ベンヤミン、バルト、コンパニオン、エイゼンシュテイン等)のしばしば断片的なモンタージュ論をていねいに拾い上げ、詳細に検討している(第一章)。そこで明らかになるのは、美術でいうフォトモンタージュに由来する引用のモンタージュと、映画でいうモンタージュに由来する時空間のモンタージュ(複数物語の同時的進行)が未整理のまま混在しているという事実である。筆者はそこでこの二元的定義の整理・統合を試みる。そのさいに援用されるのが読者論的アプローチである。

本論文のもっとも大きな特徴は、モンタージュ小説を読者論的に定義したことにはかならない。筆者によれば、作品テキストの内的構成要素だけに目を向けていてはモンタージュ小説の本質は見えてこない。それにたいする読者のかかわりが重要であり、そこに着目することがとりもなおさず二元的定義の統合にもつながる。引用モンタージュにおいても、時空間モンタージュにおいても、そこでの「組み立て」を担うのは読者なのである。換言すれば、「組み立て」としての読書行為を要請するのがモンタージュ小説であるといえる。作品の内部構造に関連する時空間的モンタージュと、外部のテキストとの関係が問題となる引用モンタージュがはたして統合可能であるかという疑問は残るものの、このような思い切った包括的定義の試みは評価されてよいと思われる。

筆者は次いで、ジャン＝ピエール・モレルの理論を批判的に取り入れつつ、〈縞模様〉と〈紐づけ〉という斬新なタームを使って、目に見える形でモンタージュ小説の構造を剔出する(第二章)。モンタージュ小説は、部分的にせよ全体的にせよ、複数の互いに異質な要素(「セリー」と呼ばれる物語上の意味単位)の並置(「交互的配列」)から成る。それらが描くのが「縞模様」である。また情報通信用語の「リンク」にあたる「紐づけ」は、読者によるそれらの要素のあいだの(あるいはパラテキストや外部のテキストとの)関係づけにほかならない。その意味で〈紐づけ〉とは読書行為そのものである。かくして作品は、さまざまにリンクが張られた縞模様として立ち現れる。

ここで重要なのはじつは、細かく定式化される〈紐づけ〉の様態である以上に、「カット」の概念ではないかと思われる。「カット」とは、セリー間の切断であり、「語りの統括放棄」(モレル)でもある。断続性を旨とするモンタージュの根幹部分に当たる。筆者によれば、「カット」がある一方で、「平坦化」もなされる。「平坦化」とはセリー間のいわば段差を減じようとする語り手のメタレベルでの介入(セリー間の関係への言

及、引用元の明示など)である。ただ、「平坦化」は意味の流通をスムーズにする反面、その過剰はモンタージュの成立そのものを危うくする。そこにモンタージュ小説のジレンマがあるといえるのではないか。筆者はこの点をとくに強調しているわけではないが、この問題に意識的であることは、たとえばアドルノやブロッホのモンタージュ概念にふれて「接合と切断」の「せめぎ合い」(p. 68)に言及しているところに見てとることができる。これと関連して興味ぶかいのは、モンタージュ小説を前にしては読者もその読みの質が試されるということである。というのも、その読みが、分断された意味の「再構成」や「復元」だけで完結するとしたら、分断じたいがもつ文学的效果を見逃しかねないからである。筆者も示唆するように、ここにモンタージュ小説読解の難所があるといえる。

筆者は次にモンタージュ小説の類型論に移り、〈縞模様〉のパターン(「色」の数や縞の様態)を分類すると同時に、モンタージュ形式と親近性が高いと考えられる三つのタイプの小説(「集合住宅もの」、「車中空想もの」、「臨終回想もの」)を検討する(第三章)。特筆すべきは、第一章から第三章にいたるまで、けっして抽象的な議論が展開されているわけではなく、定義や分類はつねに欧米、南米、北アフリカ、日本の作家の豊富な作品例に即してなされているということである(有名作家だけでもフロベール、ウルフ、ハクスリー、フォークナー、ドス・パソス、ブロッホ、アラゴン、マルロー、サルトル、クノー、ビュトール、シモン、フエンテス、コルタサル、クンデラ、ペレック、福永武彦など)。これは調査委員が一致して高く評価した点である。典型例だけでなく境界例も検討されている。網羅的とはいえないまでも、これほど多くの作品例を集め、それらを俯瞰的かつ明快な視点から分類した本論文は、今後のモンタージュ小説研究に貴重な資料を提供するとともに、その理論的基礎を築いたといえるのではないか。個々の作品の簡にして要を得た、手際のよい紹介も評価された点であった。

最終第四章では、ビュトール『心変わり』とペレック『人生使用法』という二作品を対象として「モンタージュ小説批評」が試みられている。前三章に比べて説得力に欠けるとされたのがこの章である。そこでは〈縞模様〉と〈紐づけ〉という前出の鍵概念が活かされていないこと、また『心変わり』の分析に使われている「スクリーン」というタームが曖昧であることなどが指摘された。今後の改善に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2017年1月25日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。